〔千葉医学 62, 243～246, 1986〕

〔学会〕

第731回 千葉医学会例会
第44回 千葉泌尿器科集談会

日 時 昭和60年12月8日（日）午前10時
場 所 千葉大学病院第3セミナー室

1. 泌尿器科系癌の複合糖質について

伊藤晴夫（千大）

実験動物である SC 115 および R3327 について，各種レクチンにより糖の染色を行なった。また，ヒト膀胱上皮内癌 CIS について，血液型抗原に対するモノクロナール抗体ならびに各種レクチンによる糖の染色を行なった。SC115, R3327 ともアンドロゲン依存性の消失とともにある種のレクチン・レセプターが同じパターンで消失することが判明した。また，CIS では ComA の染色性がまし，WGA および血液型抗原の染色性が消失する傾向を示した。

2. ラットのアンドロゲン非依存癌（CUB, CUB II）に対する 6-Methyleneprogesterone の影響

脇坂正美（千大）

アンドロゲン依存性ラット前立腺癌 Dunning R3327 由来のアンドロゲン非依存癌 CUB, CUBII について，5α-reductase inhilitor である6-Methylene progesterone を投与し，その影響をみた。その結果 CUB, CUB IIに対し，腫瘍の抑制効果はみられなかった。

3. 乳汁分泌を伴なう非定型的副腎褐色細胞腫の1例

藤田良一，野積邦義，藤田道夫
（市立船橋）

症例は45歳女性。頭痛乳汁分泌を主訴に近医受診し，当院脳外科内科・婦人科・外科紹介されるも異常なく，偶々肝の CT 施行したところ右副腎部に腫瘤認めたため当科紹介される。血圧は常に正常であった。CA 値は尿中 AD 軽度上昇を認めた以外異常なし。CT・エコー・AG にて右副腎褐色細胞腫の疑診のもとに手術を施行した。腫瘍は50g でのう胞状の中心部と厚さ1.5 cm の外壁よりなる褐色細胞腫であった。術後頭痛は消失し，尿中 AD も正常化したが，乳汁分泌は消失せず現在婦人科で経過観察中である。以上当院で経験した非定型的褐色細胞腫につき報告し若干の文献的考察を加えた。

4. タリウムスキャンで描出された縦隔内上皮小体腺腫

真田寿彦（真田病院）

尿路結石症の精査中に，原発性上皮小体機能亢進症が疑われた33歳女子に，^{201}Tl-Cl のスキャンを施行したところ，縦隔左上部に異常集積像を認めた。胸骨縦切開にて，大動脈弓上の上皮小体腺腫（chief cell adenoma）20×30×5 mm，2.3g を摘出した。術後14時間目にテタニー症状発現し，第6病日まで持続したが，カルチコール2A/日でコントロール可能だった。異所性上皮小体腺腫の術前部位診断に，タリウムスキャンは有効と考えられた。

5. 自然治癒した尿管腟瘻の1例

永嶌 薫（国保成東）

症例は45歳の女性。1985年7月3日，当院婦人科にて子宮筋腫の診断で手術を受けた。7月21日より腟から多量の尿流出があり7月23日 DIP 施行。右水腎症・水尿管があり，7月24日当科初診。膀胱鏡検査では右尿管口よりの尿流出は認められず，インジゴカルミン静注後30分にて腟内のガーゼがうすく青変した。7月26日より腟からの尿流出は止まり，DIP では，右水腎症，水尿管は消失していた。

6. 睾丸 adenomatoid tumor の1例

水町義信，山城 豊，大塚 薫
遠藤博志 （松戸市立）

アデノマトイド腫瘍は，主として生殖器に発生する比較的まれな良性腫瘍である。今回我々は，発生部位として極めてまれな睾丸のアデノマトイド腫瘍の1例を経験